【異例だった】令和6年11月定例会について

【令和6年11月定例会スケジュール】

- 11/19　開会（市長不在）
- 11/24　名古屋市長選挙
- 11/26　議員総会（市長就任あいさつ）
- 12/5　個人質問（各会派1名）
- 12/6　閉会

11月定例会は、"異例づくめ"の議会でした。河村たかし前市長の退任に伴い、11月24日に名古屋市長選挙が行われましたが、市役所は予算編成など差し迫る時期。様々な日程の兼ね合いから、議会は11月19日、市長不在の中でスタート。
また、議員からの個人質問は、市長と市役所が綿密にすり合わせを行うのが通常ですが、そんな時間も無かった今回は、各会派（≒政党）の代表質問に準ずる形で、各会派1名ずつ、質問時間を絞り、市長の選挙公約などについて質問を行う形となりました。

皆さまの声やご意見、ぜひお聞かせください！

《大島ひでひろ事務所周辺図》

『大島ひでひろ市政報告』をご覧いただき、誠にありがとうございます。
令和6年も様々な形でご意見、お話を聞かせていただき、本当にありがとうございました。
令和7年も皆様の声を市政に届け、より良い名古屋をつくるため、全力で仕事をしてまいります。市政へのご意見、お困りごとなどございましたら、メールでも、公式LINE（下記QRコード）でも、事務所へ直接お越しいただいても大丈夫です！
どんな内容でも、お気軽にお問い合わせください!!

公式LINE

発行責任者：名古屋市会議員　大島 英勲
〒465-0047 名古屋市名東区小池町60三和マンション1階
Tel/070-8909-9716　Fax/050-3094-8895
E-mail/hidehiro.oshima.ra@gmail.com

各SNSで市政情報など日々発信中！
フォロー・いいね！お願いします！
大島ひでひろ

身を切る改革、維新だからできる。
日本維新の会

日本維新の会　名古屋市会議員（名東区選出）

大島ひでひろ 市政報告 vol. 7

～ 古い政治を壊す。新しい政治を創る。 ～

本年もよろしくお願い申し上げます

いつもありがとうございます
令和6年は15年ぶりに新市長が誕生
大島にとっても議会に送っていただき2年目、
これまで以上に議会でしっかりと仕事をすべく、
すべての定例会で個人質問を行うなど、
「できることはすべてやる」覚悟で、取り組んでまいりました
一方で名古屋には、変わることなく続く課題がまだ山積み
目立つことや、耳障りの良い謳い文句ばかりではなく
地に足をつけ、声なき声をお聞きし、
名古屋の変わらない政治に一石を投じ、必要な変化を起こすため
まだまだ微力ですが、令和7年も全力で取り組んでまいります
記念すべき名東区制50周年を迎える本年も、
引き続きのご指導とご支援を、よろしくお願い申し上げます

名古屋市会議員
大島ひでひろ

昭和60年名古屋市生まれ/愛知県立明和高校、中央大学法学部卒/
郵便局㈱（現・日本郵便㈱）入社後、社長秘書、経営企画部など歴任/
愛知維新の会事務局次長を経て、令和5年名古屋市会議員選挙（名東区）初当選/
現所属：日本維新の会名古屋市議団

令和6年11月定例会
個人質問

「子どもを一人も死なせない名古屋の実現」

「河村市政の政策を引き継ぐ」として就任した広沢一郎市長は、選挙中から「子どもを一人も死なせない名古屋の実現」を重要政策の1つに掲げ、所信表明では、具体的な取り組みとして、「スクールカウンセラーなど子どもの相談体制の強化」「高校入試の廃止」などを挙げました。一方で、子どもの自死の要因は複雑で、また、前体制時代から、名古屋の子どもの自死は減っていないのが実状です。少なくとも、これら特定の取組みにフォーカスを当てれば解決される課題ではない。そうした観点から、新市長の姿勢を質しました。

1. 選挙の謳い文句ではなく、新市長は強い覚悟を

大島ひでひろ

厚労省の調査によれば、「10代以下の自死の原因・動機」は、何か1つが突出した要因があるわけではなく、「不詳」、すなわち「よくわからない」という割合も一定以上ある。
一方、名古屋が「子ども応援委員会」を導入した平成26年以降、少子化で10代以下の子どもは2万人以上減っているにも関わらず、ほぼ毎年、10名以上の子どもが自ら死を選ぶという悲劇が起こり続けている。
相談窓口があっても、そもそも声を挙げることができない子どもがいるのも事実で、行政はここにもっと目を向けるべき。
「スクールカウンセラー」「高校入試廃止」などに限らず、「子どもたちが個々に抱える課題やその声」と「過去起きてしまった事案の反省」に、1つ1つ丁寧に向き合い、決して選挙における謳い文句ではなく、名古屋の子どもの命を救うため「できることは何でもやる」という、市長の覚悟ある姿勢をお示しいただきたい。

「高校入試廃止」等の施策によって、全ての子どもの悩みや苦しみが解決するものではないということは重々承知している。
過去の悲しい事案にもきちんと向き合い、われわれ大人は何ができるのかを常に考え、対策を模索し努力し続ける必要がある。名古屋の宝である、子どもたちの命を守るために、全力で責務を全うしていく。

広沢一郎市長

2.「河村市政をまるごと引き継ぐ」その姿勢を問う

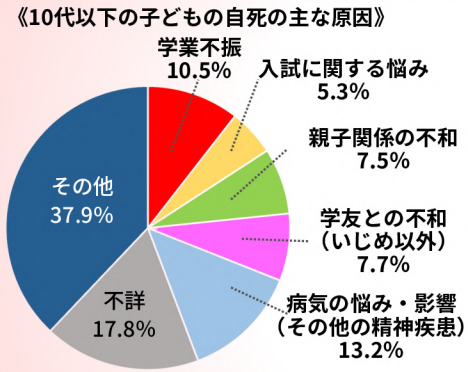
大島ひでひろ

令和6年9月定例会において、河村前市長は、大島が大阪府寝屋川市の事例をもとに提案した、いじめ問題に対する「行政的アプローチ」について、「子どもの命を救うための問題の捉え方として、現在名古屋が取組む常勤スクールカウンセラーと寝屋川の行政的アプローチ、2つアプローチがある」と見解を示した上で、
「大至急、寝屋川に行って状況を見てきたい」と仰った。
かねがね「河村市政の政策と理念をまるごと引き継ぐ」と掲げる広沢市長は、このいじめ問題に対する寝屋川市の「行政的アプローチ」をどのように捉え、また「大至急、寝屋川に行く」と仰った河村前市長の言葉をどう受け止めているのか、見解を伺う。

寝屋川市のいじめ対策の取組については、学校外から行政的アプローチによっていじめを早期解決するという、いじめ問題への対応は非常に参考になる取組の一つであると考えている。現地に自ら出向いて調査することも含めて検討してまいりたい。

広沢一郎市長

ちょこっと解説；子どもが抱える悩みは複雑・多様



（出所）厚生労働省『自殺の統計（令和５年の年間暫定値）』を参考に、大島作成

グラフからわかるとおり、子どもが苦しみ、自死にまで至る原因は、学業から家庭環境、人間関係や病気に至るまで、多様で複雑なもの。そして、そもそも原因がわからない「不詳」の割合も多いのです。つまり、子どもの悩みは「スクールカウンセラー」や「高校入試廃止」など、特定の施策で解決する問題ではなく、市は子どもたちの声なき声に耳を傾け、難しい課題にもフタをすることなく、事例から真摯に学び、子どもを取り巻く環境改善のため、不断の努力を重ねる必要があると考えます。

※個人質問の様子は、動画をYoutubeにアップしています。ぜひ右記QRコードからご覧いただき、ご意見などいただけたら嬉しいです！ →